

ようこそ モンスターズギルド

Monsters' Guild

～最強集団、何でも屋
はじめました～



十一屋翠
イラスト jonsun

「試し読み版」

ツチノコ
ブックス

プロローグ 魔物使い、路頭に迷う

「やっべえ、仕事がなくなつた」

最強と謳うたわれた魔物使い、ライズは非常に困っていた。

長く続いていた、テンド王国と隣国セルガ王国の戦争が終わってしまったからである。

「まさか戦争を終わらせたなら軍をクビになるなんて……」

彼は多くの強力な魔物を従える魔物使いであり、劣勢であったテンド王国の軍隊に所属するや否や、破竹の勢いで活躍して戦況を塗り替えた。

その活躍は凄まじく、千の獣を従える者を意味する【千獣の王】の二つ名をほしのままにしていたほどだ。

だが、魔物は生き物だ。生きてるので維持には金がかかる。つまりエサ代だ。

他の魔物使いの魔物と違い、ライズの従える魔物は強力で体の大きいものが多かった。それ故、食費だけでもバカにならなかつたのだ。

そして戦争が終わり疲弊したテンド王国には、戦いにしか使えない金喰い虫の魔物使いを養う余裕などなかつた。

つまりはリストラだ。

「なんとかして仕事を確保しないと」

ライズは頭を抱えた。

魔物たちを養う大金をどうやって捻出するか。というか、自分の生活費でもある。

「軍で活躍すれば皆から尊敬されて、給料も沢山もらえらると思つて頑張つたのに……」

だが現実には軍事費の削減によるクビ切りである。

「戦争が終わつた後だから傭兵の仕事もないだろうし、野盗退治じゃ大した謝礼金は見込めない。冒険者になつてダンジョンにでも……いや駄目だ。ドラゴンたちを養うだけの依頼なんて早々あるわけがない。つてかダンジョンに連れ込める魔物の数と大きさにも限界がある」

「あの、ライズ様……」

楚々とした涼やかな声音にライズが振り向くと、彼の魔物たちが不安そうな顔で彼を見ていた。

「ああ、悪い悪い。食事はちゃんと用意するからさ」

ライズは、従魔の一体である少女の魔物ラミアを優しく宥める。

ラミアは男を惑わす妖艶な魔物といわれているが、実際には繊細で心優しい魔物だ。

少なくともライズの出会つたこの個体に限れば、だが。

彼女には、幼い頃に人間によって誘拐された過去がある。人間は、毛皮や薬の材料以外でも魔物を手に入れようとする。見栄えがよく、おとなしい魔物を飼うことは、金持ちにとって一種のステータスだからだ。特にラミアは、美しい鱗を持っていることから好事家たちに狙われやすく、さらに彼女はラミアでも特に珍しいサファイア色に輝く宝石のような鱗を持っていた。そのため、ラミアは好事家によって見世物のように飼育されていたのだ。だが現在のテンド王国において、知性を持った魔物の飼育は魔物使いを除いて禁じられており、ラミアの誘拐は違法行為であった。幸いライズたちの活躍で好事家は捕らえられたものの、誘拐された時期が幼すぎて、ラミアには自分の所属していた氏族がどこに住んでいるのか分からなかった。

そのため、ラミアはライズ預かりとなり、彼に仕えるようになったのだ。

そうした理由から、ライズに何かあると帰る場所のないラミアもまた路頭に迷ってしまう。

「いえ、そうではなくですね……その、私たちも働きたいのです。働いて、ライズ様のお役に立ちたいのです！」

ラミアが胸元で両手を組んでライズに懇願してくる。

ラミアはライズの魔物の中でも古参の一人だ。そんな彼女の懇願は、主人であるライズの手を煩わせたくない、自分たちも戦い以外で役に立ちたいという思いからの言葉だった。

ラミアが彼の傍に居続けるのは、決して帰る場所がないからだけではない。

後ろに控える魔物たちもまた、それに同意するように声を上げる。

彼の従魔たちは互いの利益によって手を組んだ者もいたが、多くはライズによって救われたり、彼の人柄を慕ってついてきた者たちだ。

「働くっていつてもなあ。魔物を雇ってくれる店なんてないし、魔物使いの仕事となると、基本戦闘だしなあ」

ライズは困惑する。

基本的に魔物と人間は、一部を除いて敵対する間柄だ。

魔物使いという特殊な職業だからこそ、魔物を従えることができるのである。

故に、魔物が人間社会で自主的に働くという光景は、本来ありえないことだった。

「だったら、店を作ってしまった方がいいのではないかな？」

会話に加わってきたのは、ラミアと同じくライズの従魔であるユニコーンだった。

彼もまた、ライズによって欲深い人間たちから救われた魔物である。

「店を作る？」

ライズの疑問にユニコーンは頷く。

「そうだ。主が店を経営し、戦い以外の仕事を受けるのだ。例えば、私の角の力を使ってな」
ユニコーンの言葉にライズはハッとなる。

「そうか！ 回復魔法か！」

ユニコーンが頷く。

ユニコーンの角は万病に効く霊薬の材料と呼ばれ、その角には穢けがれた水を浄化する力があるといわれる。

そんな逸話を持つだけに、ユニコーンは強力な回復魔法の使い手でもあった。

「つまり、私たちの戦い以外での特技を使ってお金を稼ぐお店をライズ様に運営してもらえばいいのね？」

「然しかり」

「なるほど。俺が店を開けば、戦い以外の仕事を用意することができるわけか」

ライズは自分の従える魔物たちを見回す。魔物たちもライズをじっと見つめる。

（どうせこのままじゃ飢えて野盗でも始めるしかなくなる。だったらラミアたちの言う通り、自分の店を持つてみるか！ 上手くいけば魔物たちの力で大儲けができるかもしれないしな！）

「よし、残った金で店を始めるか！」

「オオオオオオオオオオオオオオオオウ！！」

こうして、最強の魔物使いの何でも屋運営が始まるのであった。

1章 魔物が町にやってきた

「魔物が出たぞおおお!!」

城壁に囲まれたデクスシの町に、見張りの声が響き渡る。

即座に入り口の門は閉められ、兵士たちが城壁の上から弓をつがえる。

だが、兵士たちがどこを探しても魔物の姿はない。

「魔物はどこだ!？」

「下じゃない! 上だ!」

物見の兵士が叫ぶと、兵士たちの身が影に包まれる。

雲が太陽を遮ったのか? 一瞬そう思った兵士たちだったが、顔を上げた瞬間、彼らは自分

たちの考え違いを思い知ることになった。

そこにいたのは、巨大な角と翼の生えた爬虫類。

否、その瞳には深い知性の光がある。

「ド、ドラゴン……」

兵士が呆然としながらつぶやく。

そう、これこそが世界最強の魔物、ドラゴンの姿だ。

見る者全てを威嚇し、敵対の意思を失わせる王者の姿。

兵士たちは皆死を覚悟し、我知らずへたり込んだ。

兵士たちだけではない。町を見下ろすドラゴンの巨体は、否が応でも町中の人々の目に映っていた。直接出会った経験はなくとも、ドラゴンについて聞いたことのない人間はいない。

おとぎ話で、風のうわさで、戦争の話で、ドラゴンの名は幾度も人々の話題になったのだから。恐怖と力の代名詞、出会った者が逃れえぬ死の象徴として。

そんな緊迫した状況の中――。

「すみませーん。町に入れてもらえませんか?」

明らかに空気を読んでいない声がある。場に響いた。

ドラゴンの恐怖を忘れるために、そこにいた全員が声の主を探したが、町の外を見ても誰もいない。

門の外にも内にもいない。

「あー、こつちですよー」

不思議なことに、声は上からしてきた。

最も見たくない方向、ドラゴンの方から聞こえてきたのだ。



兵士たちは意を決してドラゴンの方を見た。

「あ、どうもー。町に入れてもらえませんか？」

確かにそこに人はいた。

ドラゴンの背中に。

「「「ドラゴンに乗ってるー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！？」」」



「な、なるほど。魔物使いの方でしたか」

自警団の兵士は、ドラゴンから降りてきたライズの説明を受けて、ようやくドラゴンが敵ではないと理解した。

とはいえ、いまだに兵士たちは腰が引けたかのように、ライズから微妙な距離を保っている。

町の人々と兵士たちは、ライズと彼が連れてきた角の生えた馬の角に視線を向けていた。

（あれってユニコーンだよな。角が凄い薬になるっていう……）

（ドラゴンとユニコーンを従えているって、一体何者なんだ？）

人々の視線は好奇と恐れに満ちており、それでいて自らの好奇心を抑えられないでいた。

ライズ一行は町を守っていた兵士たちの案内により、町長の家を目指していた。

「ええ。戦争が終わって仕事がなくなっただんで、店を開こうとこの町に来たんですよ」

「お店……ですか？ ドラゴンの？」

ドラゴンに従える魔物使いが始める店がどんなものか思いつかない兵士は、安直にドラゴンが物を売る姿をイメージする。

（いや、これは違うよなあ）

「まあ、何でも屋みたいなもんですよ」

「はあ……あ、ここが町長のお屋敷です」

兵士が指した先には、他の家よりもやや豪華な屋敷が建っていた。

「案内していただき、どうもありがとうございます」

「い、いえ。それじゃあ、自分はこれで」

それだけ言うと、兵士たちは逃げるように自分の守っていた城壁へと走っていった。

「やれやれ。我々を放って帰ってもよかったのか？」

兵士を見ながら角の生えた馬、ユニコーンが呆れた声を洩らす。

「まあ練度の低い兵だしな。義務で仕事をしている人間は、自分の持ち場さえ守ればそれでいいと考えるもんだ」

ライズは町長の屋敷の入り口を叩きながら、ユニコーンに語る。

「そんなものか？」

「そんなもんだ。ま、それが普通の人間なんだけどな」



「ど、どうも。わわ、私がこの町の町長のダブタです」

案内された応接間の中央にある椅子に座ったライズは、テーブルを挟んだ向こうに座っている小太りの男、町長を見る。

「どうも。私はライズIIテイマーです」

たとえ小物ぶりが全開であろうとも、相手は町の権力者であるため、営業モードの言葉遣いで話しかけるライズ。

「はあ。それで、その……ライズさんが、わが町に何の御用でしょうか？ その、ドラゴンを連れて……」

町長は怯えた様子で窓の外に見えるドラゴンをチラチラと見ながら、ライズの真意を尋ねてくる。

「その前に……」

交渉を始める前に、ライズは町長の横に座る逞たくましい男を横目で見て、コイツは誰だと言外に問う。

「おお、そうでした！ 彼はこの町の冒険者ギルドのギルド長で、名をトロウと言います。彼はこの町の治安維持にも協力してくれているんですよ！」

話を押し付ける相手ができたと、内心で喜ぶ町長。彼はどこまでも小物かつ臆病者であった。「トロウと呼んでくれ。お貴族様」

ライズが苗字を名乗ったことから、貴族と判断したトロウは、あえてそこを強調してライズに挨拶した。

「いやいや、俺の苗字は戦争の勲章みたいなもので、一代限りの安い爵位ですよ。ライズと呼んでください。トロウさん」

この世界では、戦いの褒賞として爵位を授けることが稀まれにある。

ただし、それは榮譽というよりも、金や物で褒美を与えるには活躍しすぎた者に金の代わりを与える名前にすぎない。

一部の兵士たちには、割に合わない褒賞とまで言われている残念なものだ。

実は長期的に見ればそうでもないのだが、それはまた別の話である。

「それで、ライズ……さん、貴方は何故この町に？」

完全に交渉の相手がトロウに替わっているが、ライズは気にせず交渉を続けることにした。むしろこの男の方が、町長よりも話が通じると確信したからだ。

「ドラゴンを見てお分かりでしょうが、私は魔物使いです」

「魔物使い!？」

町長が声を上げる。

魔物使いの存在は普通に知られた職業ではあるが、それでもドラゴンを従えることのできる者となると話は別だ。

何故なら上位の魔物を従えた魔物使いが、フリーでその辺をフラフラしているはずがないからだ。常識的に考えれば、それほどの魔物を従えた魔物使いは国にスカウトされる。国防のため、そして監視のために。

そんな凄惨な魔物使いが何故こんな所に来たのか、町長は気が気ではなかった。

そしてトロウもまた、別の意味で緊張していた。柄にもなく敬語で会話するくらいに。

（ドラゴンを従え、苗字を持った魔物使い。俺の推測が間違っていないければ、この男の正体は間違いなく……）

「いや、実はこの町で魔物を使った何でも屋を営もうと考えてやってきたんですよ」

「……へ？」

だが、予想外に牧歌的な答えに、2人は間の抜けた声を上げてしまった。

「何でも屋……ですか？」

正直に目的を告げたライズに対し、冒険者ギルドのギルド長であるトロウは懐疑的な声音で質問をする。

（まあ確かに、ドラゴンを従えた魔物使いが何故こんな所で商売を？　と思うのは当然だろうな）

「元はといえば、隣国との長きに渡る戦争が終わったことに端を發します」

ライズはゆっくりと、トロウたちを警戒させないように事情を説明し始めた。

「私はこれまで軍のお抱え魔物使いとして働いていたんですがね」

（やはり軍人か）

トロウはライズの言葉を一言ずつ吟味してゆく。彼の言葉の裏に隠された真意を聞き漏らさぬように。ギルド長として長年多くの人間と腹の内を探り合ってきた技を駆使して。

「実は戦争が終わったことで、もう魔物使いは必要ないと言われてお払い箱になってしまったんですよ」

「そんなバカな!？」

ありえない理由にトロウが悲鳴に近い声を上げる。

「ドラゴンを従えた魔物使いを放逐する!? そんなことありえないでしょう!」

冒険者を束ねるギルドの長とは思えない狼狽ぶりであるが、トロウの反応は正しい。

最強の魔物の一角であるドラゴンを従えた魔物使いは、ただいるだけで周辺国に睨みを利かせることができるからだ。

闘わずして敵を躊躇させるということは、それだけで十分すぎるほどの効果を發揮する。

ドラゴンをはじめとした魔物たちの維持費が必要であっても、同じ費用で軍を維持し、時に戦いを行うと考えるなら、個体として強力なドラゴンの方が圧倒的にコストパフォーマンスが高いからだ。人間ならばそれが小競り合いであっても、一度の戦闘で複数の死傷者が出る可能性は低くない。そうなれば徐々に戦力が減ってしまう。同じ費用で双方を運用しても、消耗の差は段違いだ。

さらにドラゴンは、装備を整えない状態でも強い腕力と硬い鱗に守られている。複数の敵を一掃する強力な攻撃ブレスを吐き、空を飛んで人間よりも迅速に現場に急行できる。その巨体から繰り出される攻撃は、尻尾の一振りでも人間にはとてつもない脅威だ。

それを排除するなど、とうてい信じられない愚行であった。

「でも事実ですよ。なんだったら調べてもらっても構いません」

ライズからすれば、己の素性を調べられても特に痛くもかゆくもないので、自分から調査を提案してみせる。そうすることで、自分の言葉は真実だとアピールするわけだ。

信じられないならいくらでも調べてくれという言葉は、自分の潔白を証明すると同時に、相手に自分を疑って調べてしまったという負い目を負わせる非常に便利な交渉の手段であった。

「ライズさん」

トロウがマジメな顔でライズに言葉を投げかける。

（腹の探り合いはお互いの心象を悪くするだけか。なら理詰めで話し合うしかないな）

判断材料が少なすぎることから、トロウは交渉の仕方を変更する。

「単刀直入に言いますと、ドラゴンを町中に入れるわけにはいきません。たとえば、あのドラゴンが貴方の命令に絶対服従してもです」

トロウの言葉は、町の治安を守っている人間として当然の発言だった。

店の中に抜き身の武器を持った人物が入ってきたら、誰だって買物どころではない。

家の中に武装した赤の他人を連れ込む人間はいないだろう。

「もちろん町中で暮らしたいなんてことは言いませんよ。城壁の外……そうだな、大魔の森側がよさそうですね。あそこなら魔物が自分からやってくるでしょうから」

「大魔の森……」

この大陸には魔物の発生する危険な領域が多数存在する。

そうした土地は、旅人のようなよそ者でも分かるように、名前に「魔」という言葉をつけるのが慣わしだった。

つまり、大魔の森は魔物が生まれる危険な森という意味である。

この町、デクスシの町が城壁に守られているのは、そうした理由があったのだ。

もっとも、空を飛ぶドラゴンには全く意味がなかったわけだが。

ライズの発言した「魔物が自分からやってくる」という言葉は、そんな危険な森から町を守ってやる。その代わり、ここに住まわせろという意味だった。

(だから取り立てて特徴もないこの町に来たのか?)

説明を受けてもなお、真意を測りかねるトロウであったが、内心ではもろ手を上げて歓迎したいと考えていた。

何しろ大魔の森には大量の魔物が生息している。

そして、デクスシの町の兵士は、お世辞にも練度が高いとはいえない。

闘える者の大半が隣国との戦争に連れて行かれてしまい、戦争が終わった今もまだ戦後処理や敗残兵の討伐などに駆り出されているからだ。

城壁のお陰で何とかなっているが、高レベルの魔物が率いる群れに襲われ、城壁を破壊され

れば、瞬く間に壊滅する可能性だってある。

そこにドラゴンを従えた魔物使いが、森から出てくる魔物たちと自主的に闘ってくれるというのだから、願ってもない話だった。

「大変魅力的な話ですね」

何かの拍子で交渉が決裂しないよう、トロウはライズの提案に好意的な意思を持っていると匂わせる。だが個人的にはその条件を受け入れたくとも、決定権を持つのはあくまでも町の代表者である町長だ。そもそもライズは町の外に住みたいと言っているのだから、本来なら町の住人の許可を取る必要はなかった。ライズはあくまでも商売のことを考えて、穏便に話し合いにきたのだ。

「町長、ライズさんの話は町の防衛を考えれば大変ありがたいことです。森の魔物の繁殖期も近いし、今後の町の安全を考えるならライズさんを受け入れた方が得ですね」

「ふうむ、そうですね。トロウさんがそこまで言うのなら……」

一見トロウの言葉に説得された感じではあるが、実際のところ、この会話は責任を押し付けするための駆け引きにすぎなかった。

トロウが強く勧めたのだから、何かあったら悪いのはトロウだというつもりなのだ。

もちろん、ライズとトロウもそのことは理解している。

気づかれたと思っていないのは、当の町長くらいのもんだろう。

(念のため、もう一押ししておくか)

「ああそうだ。実は私の従魔にはユニコーンがおります。ユニコーンは回復魔法を使えるので、町の人たちの怪我を治せますよ」

「ユニコーン!? あの伝説の聖獣ですか!?!」

ユニコーンの名を出され、トロウが興奮を隠しもせず喰いついてくる。

「ええ、そのユニコーンです」

(正しくは性獣だけだな)

ライズは心の中で嘆息する。ユニコーンといえは清らかな乙女しか背に乗せず、その角には強い癒しの力を秘め、怪我を治し、穢れた水を浄化する力を持った存在とされている。その純白の毛並みのせいか聖なる獣などといわれているが、実際のユニコーンは処女が大好きな変態であった。男はたとえ主であろうとも背中に乗せず、処女の少女だけが自分に乗っていいという筋金入りのロリコンである。たとえ乙女であろうとも、ババアはNGと断言する潔い馬だった。

「おお、そのユニコーンはどちらに!?!」

「屋敷の入り口で待ってもらっています」

「ほほう！」

先ほどまでの落ち着いた態度から一変し、トロウはすっかりユニコーンに興味津々だった。

トロウが興奮するのも無理はない。冒険者は未知と財宝と名声を求める生き物。

希少な聖獣がすぐ傍にいとあつては、いても立ってもいられないのだろう。事実、窓の外からはユニコーンを見に来た人々の声が聞こえてくる。そんな賑わいを聞いたトロウは、早くユニコーンを見に行きたくて仕方ないとソワソワしている。

「ユニコーンだけではありません、植物の魔物であるトレントは不作の畑を豊作にする協力ができますし、空を飛ぶ魔物を使えば危険な場所に生えている薬草を取りに行くこともできます。我々を雇ってくだされば、必ずや町のお役に立つと約束いたしますよう」

「なるほど……」

ライズにそう言われた町長は、窓からユニコーンを見ようと顔を出しているトロウに声をかけようとして諦めた。

どう考えてもアレは使い物にならない。

それは町長でなくとも一目瞭然であった。

「そうですね。町を守ってもらえて、さらに回復魔法を使える聖獣までいるのであれば……」

町長が再度トロウに視線を向ける。

しかし、ユニコーンにはしゃぐ相談役に責任を押し付けるのは無理かと、ため息を吐いた。
「あの、よろしければユニコーンを見に行きませんか？」

「いいのかね!？」

実際に私が従える魔物を見れば、危険かどうかも分かるでしょうと言いかけたライズの言葉に、トロウの言葉が覆いかぶさる。

「……ええ、町長さんもどうですか？」

「そ、そうだね」

決断が先延ばしになったことを内心喜んでいるのだろう。町長は、あからさまにホツとしていた。



屋敷の外に出ると、そこには少女の手に自らの角を近づけるユニコーンの姿があった。

ユニコーンの角が少女の手に触れると、角に淡い光が灯り、少女の手に伝ってゆく。

どうやら少女は手を怪我していたらしく、ユニコーンの放った光がその傷を癒してゆく。

「……すごい！ 怪我があつという間に治っちゃった！」

少女は自らの手を周囲の住人に見せて、傷が完治したことをアピールした。

「おお、キレイに消えたなあ」

「回復魔法ってこんなに凄かったのねえ」

町の人が驚くのも無理はない。

これまで高度な回復魔法の使い手は国の命令で戦争に駆り出されていたため、一般人が怪我を瞬時に治せるレベルの回復魔法を体験する機会はほとんどなかった。

王都や大都市であれば高位の回復魔法の使い手と遭遇する可能性はあったが、この町の規模でそれを期待することはできないだろう。

もつとも、そんな町を選んだことも、ライズの狙い通りなのだが。

「ふふふ、美しい少女のためならどんな怪我でも治してみせよう」

少女に感謝され、ユニコーンがキザなセリフを口にする。

(またデレデレしてんなあ)

一見さわやかな聖獣の謙遜に聞こえるが、付き合いの長いライズには、もっと少女と触れ合いたいという本音が丸聞こえであった。

「せっかくですので、ユニコーンの治療を受けてみませんか？」

ライズは町長にユニコーンの有用さを理解してもらうため、治療を進める。

「では……そうだね。私も歳なのでよく腰が痛くなるのですよ。この痛みをなくすことはできませんかねえ?」

「お任せください。ユニコーン、この人を治療してくれないか?」

「ふむ、交渉は終わったのかね主……げっ」

ユニコーンが町長を見て嫌そうな声を上げる。

「町長さんは腰の具合が悪いらしくてね、ちょっと治療してあげてほしいんだ。頼めるよな?」
「……承知した」

一見普通の会話であったが、そこにはせっかく少女と触れ合った後なのに、こんな脂ぎったおっさんに触らないといけないのかあ、というユニコーンの深い悲しみが含まれていた。

「では治療するぞ」

ユニコーンはやや乱雑に町長の腰に角を押し当てる。

「痛っ」

角が当たって、町長が軽い悲鳴を上げる。

「男なら我慢したまえ」

先ほどの少女に対する態度とは正反対の雑な対応をしながら、ユニコーンの角が淡く光り始める。

そして、町長の腰が神秘的な光を放ち始めた。

「お……おお！ 腰の痛みがすうっと消えたぞ。こりゃあ凄い！」

町長は興奮した様子で自分の腰をさする。

「へえ、馬さんの魔法は腰痛に効くのかい。コイツはいい話を聞いたよ」

「馬ではない！ ユニコーンだ！」

老婆に馬と言われてユニコーンが激昂する。どうやらユニコーンのに大事なところらしい。

「ユニコーンさん？ 悪いんだけど、あたしの腰も頼めるかねえ」

「^わ僕も頼むよ」

気がつけば、何人もの老人たちが町長の後ろに列をなしていた。

「な、ななっ!？」

狼狽するユニコーン。彼の胸中は、何故自分が少女ではなく老人や老婆の相手をしなくてはならないのかという疑問でいっぱいになっていた。

「せっかくだ、この人たちの治療も頼むよ。ユニコーン」

「あるじいいいい!？」

ユニコーンが悲鳴を上げる。

「ありがたやありがたや」

気がつけば、老人たちがユニコーンを拝み始める。

「や、やめろ。分かったから、治療するから拝むな！」

ユニコーンが悲鳴を上げながら渋々治療を始める。

「おお、さすが聖獣じゃあ。なんと謙虚な」

拝まれるのを拒絶して治療を行う姿を、まるでストイックな聖者のそれと勘違いした老人たちがますます拝んでしまい、渋っ面しぶづらになるユニコーン。

「どうです？ 安全でしょう？」

ユニコーンが老人を治療する光景を背景に、ライズは町長に語りかける。

トロウは、ユニコーンを凝視するのに忙しいので無視だ。それどころか、気がつけばどこからかスケッチブックを取り出し、ユニコーンの絵を描いている始末。

「そうだねえ。腰の痛みがキレイに消えたのは何年振りやら」

初めはドラゴンに怯えていた町の住人も、ユニコーンが普通の馬と同じサイズであること、会話ができること、そして回復魔法で少女の傷を治してくれたことで警戒心を薄めていた。

体の痛みがなくなったことで、町長はライズが、いやユニコーンが町に住む利点を見出す。

(しかしドラゴンをどうするか)

やはり問題になるのはその一点であったが、悩む町長の耳元でライズが囁く。

「そうそう、私の従魔にはラミアやセイレーンといった美しい魔物たちもいますよ。もちろん私の支配下にあるので、人に危害を加えることはありません。後日、視察に来ていただいた時には彼女たちに接待をさせますよ」

「分かりました。確かに貴方の提案は町のためになります。よろしいでしょう。私の裁量で貴方が町外れに住むことと、何でも屋を開くことを許可いたしますしょう！」

魔物は恐ろしいが、恐ろしいだけではない。魔物の中には、人とはほとんど変わらない外見の半人半獣の魔物がいるのだ。そういうった魔物の大半が美しい外見をしている。そんな中でも人外の美貌といわれるほど美しい魔物とされるラミアやセイレーンの接待があると聞いた町長は、悩むのをやめて二つ返事で承諾した。

町長は自分が責任を負いたくない小物だったが、それ以上に女に弱い俗物でもあった。

「ありがとうございます！」

こうしてライズは、デクスシの町で何でも屋を開業する許可を得たのだった。

2章 モンスターズギルド、営業開始！

「よし、コレで完成だ！」

デクスシの町の城壁外に、小さな掘っ立て小屋が完成した。これこそがライズの経営する何でも屋の事務所である。単純に予算の関係でまともな家を建てられなかったのだが、それはこれからの稼ぎでまた建て直せばいいとライズは気軽に考えていた。

事務所の後ろには柵で覆われた牧場が広がっており、その中にライズの魔物たちがのびのびと暮らしている。

「ライズ様、ようやく始まるのですね」

ライズの横に寄り添うように、書類を持ったラミアが並ぶ。彼女は人型に近い魔物だったので、ライズの店舗申請のための書類作成を手伝ってくれたのだ。

「ああ、魔物の何でも屋『モンスターズギルド』の開店だ！」

「「「オオオオオオオオオオ!!」」」」

ライズの宣言と共に、魔物たちの雄叫びおたけが響き渡った。



「……暇だ」

デクスシの町外れに何でも屋を開業して、はや1週間。ライズは、店舗に依頼主がやってくるのを待っていた。だが誰も来なかった。欠片も来なかった。

「何故だ！ ちゃんと店が開店したことを宣伝したんだぞ！ ラミアやユニコーンといった人間になじみのある外見の魔物を連れて行って宣伝をしたというのに！！」

確かに、ライズは温厚で見目麗みよれしい魔物たちを連れて町中を練り歩いた。

ただ、とても重大な問題に彼は気づいていなかったのだ。

「あの、ライズ様？」

そこに、半人半蛇の魔物であるラミアが声をかける。

「どうした？」

「町の人たちは、私たちにどんな仕事を依頼すればいいのか分からないのではないですか？」

「分からないって、どういう意味だ？」

ライズが首をかしげる。

「はい。魔物の何でも屋といっても、魔物がどんな役に立つのかを町の人たちは知らないのだ

と思います。普通の人間は町から出ませんから、魔物を深く知る機会がないのではないかと」
「……そ、そうだったのか!？」

ライズが驚愕して目を見開く。ラムアの言葉は、魔物の生態を知り尽くしているライズだからこそ、理解の及ばない発想であった。マニアの常識は、一般人にとつての非常識なのである。「くっ! こうなったらもう一度宣伝しに町に行くか! 今度は魔物がどんな役に立つかを説明しながら!」

仕方ないと腰を上げるライズ。

「いやー、それだけじゃダメみたいニャよ」

子供のような声がライズを制止する。

「……ケットシーか」

ライズが掘っ立て小屋の入り口を見ると、そこには2本足で立つ猫の姿があった。

彼こそはケットシー。猫の妖精と呼ばれる魔物である。

「町の情報を持ってきたニャー!」

そう、彼は見た目が猫そのものであることを利用し、ただの猫に扮して町の情報を探っていたのだ。

「おお、でかしたぞ。ケットシー!」

「ニヤッ！」

ライズの言葉に誇らしげになるケットシー。

「それで、どんな情報を手に入れたの？」

ラミアがケットシーを促す。

「ニヤ。まず、ご主人のことニヤけど、町の住人からはかな〜り胡散臭く見られてるニヤ」

「胡散臭い……」

「だ、大丈夫です、ライズ様！ 私たちはライズ様がとてもお優しい方だと知っておりますから！」

胡散臭いと断言され、落ち込むライズをラミアが励ます。

「あとドラゴンが怖いって。試しに仕事を頼もうにも、店に行つてドラゴンに見つかったら、頭から食べられそうで行けないって言つてたニヤ」

「食べねえよ！」

「ケットシーさん！ 何か役立つ情報はないのですか!？」

まともな情報はないのかとラミアに促され、ケットシーが顔を手で洗いながら頷く。

「そうニヤね、悩みを持つていた人間が何人かいたニヤから、それとなく接触して悩みを解決するといひニヤよ」

そうやって、ケットシーは町のさまざまの人々の悩みやトラブルをライズに伝えていく。このようにケットシーは、ライズに情報を渡すため、猫として数々の町で諜報活動を行っていた。戦闘の役には立たない彼だが、その諜報能力故にライズたちの命を救ったことは、一度や二度ではない。また、諜報用の魔物はケットシーだけではない。ライズには、さまざまなルートから情報を得ることのできる情報源が存在していた。

「なるほど。その悩みだとアイツらが適任か」

ライズは、連れて行く魔物の選別を始める。

「あと、腰の痛いお婆ちゃんたちが結構いるから、ユニコーンは絶対連れて行くニャ」

「ああ、分かった」

数分後、老婆たちの相手をしろと告げられたユニコーンが悲鳴を上げたのはいうまでもない。



町の中ほどに近いそこは、小さな広場となっていた。

その道を商人たちの馬車が利用するには、そこに至るまでの道が狭く、無計画な住宅の乱立が故に偶然生まれた空白地帯であった。

そうした理由から、この小さな広場は町の住人の憩いの場となり、仕事ができなくなって暇を持て余した老人や、働くには幼すぎる子供たちの遊び場となっていた。

「アイタタツ」

談笑をしていた老婆の1人が腰を押さえる。

「おっ、いつもの腰痛か？」

勝手知ったる仲である老人たちは、お互いの体のポンコツ具合もお見通しだ。

「この時期はすーぐ痛くなるんだよねえ」

「分かる分かる。俺も雨が降りそうになると膝の傷が痛くなるからなあ」

老人の1人が、老婆に合わせるように自分の膝を押さえる。

「ははは、またロイドの膝の古傷が出たよ。バカデカイ魔物を倒した時に膝をやっちゃまって、そのまま引退したんだろう？」

「バカ野郎！ 俺のセリフを取るんじゃないやねえ！」

どうやら老人たちにとって、これは定番の話題であったようだ。

「とはいえ、痛いのは嫌だねえ……アタタ」

老婆はそーっと体を動かして、腰が痛くない姿勢を取る。

「戦争は終わっても、俺たちの体の痛みは終わらねえなあ」

「それが終わるのはお迎えが来る日だよ」

「違いねえ！」

1人の老人があらぬ方を見る。

「どうしたい、ボルド？ お迎えが来たか？」

「いや、何か賑やかな音が聞こえねえか？ 祭りみたいな音だ」

ボルドと呼ばれた男が妙なことを言いだしたので、老人たちは首をかしげる。

「おいおい、収穫祭はもつと先だぞ。本気でお迎えが来たのか？」

ボルドがとうとうボケたのかと心配したが、自分たちの耳にも何やら騒々しい音が聞こえてきたことでキョロキョロと首を動かす。

見れば近くで遊んでいた子供たちも、音の出所を探していた。

彼らが音の出所を探っていると、それは自分から姿を現した。

「どうも皆さん！ 毎度おなじみ魔物の何でも屋、モンスターズギルドです！ 人間では困難な仕事を魔物にやらせてみませんか？ 子守から畑の手入れまで、いろいろできますよー！」

音の主は、ライズたちであった。彼らはその手に手製の簡単な楽器を持ち、周囲の視線を集めては店の宣伝をしていた。

「お、おい。アレって魔物じゃないか!? 何で魔物が町の中にいるんだ？」

老人の1人が驚きで目を丸くする。

「何言ってるんだい！ この前ドラゴンが出たって騒ぎになっただろうが。あれはそのドラゴンを連れて来た魔物使ってヤツの魔物だよ」

「え？ ドラゴンが来たって冗談じゃなかったのか？」

「ああ、そういやロイドはそんなとき居眠りしてたっけな」

のんきな老人たちは、目の前に魔物が現れたというのに、逃げもせず、その場でライズの魔物たちの噂話に興じ始めた。

既にお迎えを待つ身であるが故の鈍感さか、一応は逃げようとする老人の姿もあったが、体が痛むのかすぐに膝をついてしまう。

ライズはそんな老人たちの姿を見つけて、にこやかに声をかける。

「おや、どうしました？ お体の具合が悪いのでしたら、ウチのユニコーンに診てもらってはいかがですか？ ユニコーンは怪我の治療ができます。古傷や腰の痛みを和らげることもできますよ！」

老人たちが逃げる間もないほどスムーズに、ライズはユニコーンによる治療を勧める。

「今なら開店セールで、お代は半額ですよ！」

「へえ、半額ならいいじゃないか！」

珍しいものの好きなロイドが、顔をほころばせてやってくる。ロイドはさりげなく膝を突いた老人とライズの間に立って、自らを盾とする。

「俺あ前に膝をやっちまってな。雨が降るとどうにも痛むんだ。こいつも治せるのかい？」

ロイドは珍しいものを見るのが大好きなため、冒険者の道を選んだ男だった。故に彼はライズの従える魔物を間近で見たいという欲求に駆られた。魔物を狩る側の職業であったが故に、彼はユニコーンから治療を受ける機会などなかったからだ。

「古傷ですと傷を癒すには時間が経ちすぎていますので、完治は無理ですね。でもユニコーンに治療してもらえば1週間は痛みを感じずに過ごせますよ」

癒しの聖獣ユニコーンといえども、致命傷に等しい大怪我とふさがった傷の後遺症までは治せない。ユニコーンの治療は生命由来の力、自己の再生能力の増大を基礎としているからだ。

「ははっ、1週間も楽になれるなんてありがたいがてえ。どうせ、そのうちお迎えが来るんだ。今だけでも楽にしてくれよ」

「分かりました。ユニコーン、やってくれ」

「……了解した」

今回も老人たちの治療をしなければならぬのかと、ユニコーンが憂鬱げに頷く。

ユニコーンの角に光が宿り、ロイドの足に光が伝わってゆく。

3章 役に立つ者たち

「クギヤアアアアア!!」

朝日と共にコカトリスが鳴き声を上げると、牧場の魔物たちが目を覚ます。

即座に動き出す者、のっそりと目を覚ます者、体が温まるまでボーっとする者。

種族によって行動はさまざまだ。

そんな中、誰よりも早く行動を開始する者たちがいた。

「今日もライズ様を起こすのはボクだよ〜♪」

ご機嫌な様子で掘っ立て小屋のドアに手をかけたのは、ライズの従魔であるハーピーであった。

空を飛び、地を這う獣を狩って生きる空の乙女。日の出と共に目覚める彼女の朝は早い。

大好きな主であるライズに朝の挨拶をするためにやってきたのだ。彼女はライズの卵を産みたいと常々思っていた。鳥頭なので細かいことは考えない。好きなんだから卵を産みたい。彼女の思考は、非常にシンプルであった。ちなみに鳥なので無精卵も生む。

だが、ライズを起こす役目を狙うのは彼女だけではない。

「お待ちなさい。ご主人様に挨拶するのは、わたくしの役目ですわ！」

ドアに掛かっていたハーピーの翼が、緑の鞭で弾かれる。

「痛っ！」

ハーピーは柳眉しゅうみを吊り上げながら、自分の翼を弾いた張本人の方を見る。

「ちよっと、ドライアド！ 痛いじゃない！」

ハーピーの向いた先には、真つ赤なバラ色のスカートを穿いた美女がいた。

否、スカートではない。それはバラの花びらそのものだった。

彼女こそは花の妖精ドライアド。彼女もまたライズの従魔である。

「どうせ3歩歩いたら忘れる程度のオツムなので、構わないのではなくて？」

「ソレは迷信だつてば！ 鳥の魔物だけどトリ頭じゃないモン！」

一般的に鳥の魔物は頭がよくないといわれるが、実のところ、そこまで露骨に頭が悪いわけではない。特別いいわけでもないが。

「あらそうなの？ でも、そこにいると危ないと思いますわ」

「え？」

ゴッ！！

その時、勢いよく掘つ立て小屋のドアが開き、手前にいたハーピーを突き飛ばした。

「ほら、言わんこっちゃない」

ちなみに、突き飛ばしたのはドライアドだ。

彼女はハーピーを挑発し、彼女の意識を自分に寄せている間に、スカート状の花びらの後ろから迂回するように自らの鳶とを伸ばしてドアを開けたのだ。

「ふふ、今日の勝負はわたくしの勝ちですわね」

勝利を確信したドライアドは、ベッドで眠るライズを起こす自分を夢想する。

「ご主人様、朝で……」

「ああ、お早う」

ライズを起こすべく、掘っ立て小屋に入ったドライアドは凍りついた。

それはライズが起きていたからではない。

彼女が硬直した理由は、ライズの横にラミアがいたからだ。

「そ、そんな！ 朝の寒さに弱い貴方が何故先に!?!」

「ふふふああああ……、油断しみましたね。こんなこともあろうかと、昨晚からライズしまのお部屋の前で待機していたのでしゅよ」

驚きの声を上げるドライアドに、ラミアはあくびをしながら勝ち誇る。

若干舌つ足らずなのは、眠気のせいだろう。

「まさか自分の弱点を理解して、対策を練っていたなんて！」

「ふふーん」

寝ぼけているのか、普段のお淑やかさが抜けているラミア。

「こうなったら、今夜からはご主人様のお部屋への入り口を蔦で固く……」

「よくもやったなああああ!!」

「ひきやあああああ!?!」

ラミアへの対策を練ろうとしていたドライアドに、ハーピーのとび蹴りが炸裂する。

ハーピーは鳥型の魔物であるため、足は鳥と同じ形状をしている。それも狩りをする猛禽の爪だ。この足で攻撃されれば、大抵の生き物はひき肉になってしまっただろう。

「危ないですわねえ！ 蔦でガードしなかったら、わたくしの美貌が大変なことになってしまったわよ！ 加減することを覚えなさい!!」

ハーピーの攻撃を間一髪でガードしたドライアドが抗議する。

「先にやったのはそっちじゃない！」

「そっちだって、いつも妨害してるじゃありませんの！」

そのまま口論となる2人。

このようにライズを慕う彼女たちは、毎朝彼を起こす役を奪い合っているのだった。

「やれやれ、飽きもせずまたやってるのか」
雄の魔物は、巻き込まれては適^かわんと我関せずの構えである。



「今日の仕事はラミアが大工の手伝い、ユニコーンはいつもの……」

「いい加減少女の治療がしたいのだが！ 少女の子育てでも構わないぞ!!」

ライズはユニコーンの抗議を無視して、スケジュールを確認していく。

「ドラゴンたちは相変わらず仕事なしか。まあドラゴンを使う仕事も思いつかんしなあ……。トレントとドライアドは新しい依頼主の開拓だな」

「ええ、ケットシーが町の集合畑のお野菜の具合がよくないみたいだと農家の方たちが話しているのを聞いたようですので、わたくしたちが様子を見に行くことになりました」

「まあ2人なら問題ないだろう。けど初めての客だから、今日は俺もついて行くよ。ラミアとユニコーンは単独でも問題ないな？」

ライズは初めて仕事を依頼してくる客や、初めて魔物が仕事をする時は、必ず立会いをしてきた。会話の可能な魔物であっても、初めての仕事では何が起こるか分からないからだ。そも

そも怖がられて、仕事にならないこともある。

「はい！ お任せください！」

「どうせ老人しか来ない仕事だ。トラブルなどあるまいよ。他の人間どもの目もあるしな」

ラムアが元氣よく返事をし、ユニコーンは皮肉交じりに答える。人間に追われた過去があるせいで人間には懐疑的なユニコーンだったが、デクスシの町では冒険者ギルドからユニコーンをはじめとしたライズの使い魔には手出し禁止の通達が出されていた。

そのため、魔物たちは、一部を除いてライズなしでも町の中を安全に歩くことが可能であった。

「じゃあ行くか」

「ええ、トレントーツ、行きますわよー！」

ドライアドが掘っ立て小屋の外に声をかけると、外の木がワサワサと動き出した。

「おおおおお」

間延びした声と共に木の根が持ち上がり、枝が人間の腕のようにしななって動く。

そう、これはただの木ではなく、植物の魔物トレントだった。

「そんじゃ行ってくる。何かあったら畑の方に来てくれ」

「承知いたしました」

ラミアに見送られ、ライズたちは牧場をあとにしたのだった。



「ここが町の食料事情を一手に引き受ける集合畑か」

ライズたちの前には、視界一面に広がる麦畑の姿があった。

「人間たちは何でこんな風に植物を詰めて植えるのかしら？ もっと伸び伸びすごせるように植えればいいですね」

農業という概念は知っているものの、植物の魔物であるが故に、その有用性とは縁のないドライアドが首をかしげる。

「何でだろうなあああ」

トレントも不思議そうに麦畑を見ていた。

「お〜い！」

ライズたちが麦畑を眺めていると、彼らを呼ぶ声が聞こえてきた。

声のした方に振り向くと、純朴そうな若者が手を振っている。ライズたちは頭を下げて一礼すると、彼もニコリと笑って近づいてくる。

「あんたら、噂の魔物使いだろ。ドラゴンに乗ってきたっていう」

「ええ、初めまして。モンスターズギルドのライズと申します」

「俺はこの辺の畑を管理してる者で、ジョンっていうんだ」

「よろしく、ジョンさん」

ライズが手を差し出すと、ジョンもまた手を出して握手をする。

「ジョンでいいよ、ライズさん。それで、今日は何でこんな所に？　ここにゃあ畑しかないぜ？」

ジョンは突然現れたライズを内心警戒していた。畑番であるジョンは、畑を荒らす害獣から畑を守る義務があるからだ。畑を荒らすのは獣だけではない。野菜を食べる魔物もいる。ライズが使役しているのは魔物だ。仮にライズが禁じてても、魔物が勝手に野菜を食べないとも限らない。

「いえね、ウチの魔物の中には植物の魔物がいるんですよ。それで何でも屋を生業としているウチとしては、農家の方にも^{ひいき}贖^{ひいき}にしてもらおうと思ひまして。そのための宣伝にやってきたんですよ」

そう言つて、ライズは一步下がって後ろにいる魔物たちの姿を見せる。

「こっちが、今回助手として連れてきたドライアドとトレントです」

「ドライアドといえます。よろしくお願いたしますわ」

ドライアドは笑顔で微笑みながらスカート状の花びらをつまみ、貴族の令嬢のように優雅にお辞儀をする。

「あ、ど、どうも！ お、俺のことはジョンって呼んでください！」

人外の美貌を持つドライアドに微笑まれたジョンは、思わず丁寧にドライアドに挨拶を返す。一見魔物には見えないその姿に、ジョンはすっかりドライアドをどこかの良家の令嬢だと勘違いしてしまった。まさに男を惑わす森の乙女の名に恥じぬ手際である。

「俺はトレントオオオ」

トレントが杖をざわざわと動かしながら挨拶する。

「う、うわっ！ あ、ああ、これが例の魔物ってヤツか」

トレントを見て驚いたジョンだったが、魔物を見た驚きよりもドライアドの美貌の方に注意が向いていたために、それほどトレントに嫌悪感を示すことはなかった。つまり、若い男にとつては、怖い魔物よりも美人のお姉ちゃんの方が重要ということだ。強いスケベ心が恐怖心に勝利した瞬間であった。

とはいえ、これはトレントが恐ろしい姿ではなく、一見するとただの木にしか見えなかったことも大きいだろう。

4章 最強ドラゴンの悩み

モンスターズギルドで暮らす魔物たちの朝は早い。

ある者は主を起こす権利の奪い合い競争に明け暮れ、ある者は体温が上がるまで待機し、ある者は卵を産む。

そしてある者は、自分の食事を確保するために飛び立つ。

デクスシの町の東、魔物蠢く大魔の森の空を巨大な影が覆う。

突然の曇り空に森の魔物たちは動きを止めた。

否、それは雲ではない。

森の魔物たちはソレの到来を察知し、自らの存在を悟られぬように身を潜めたのだ。

だが、ソレにそのような小さな小ざかしい手段は通用しない。

鷹よりも高性能な眼は遙か地上の魔物たちの姿を観察し、どの魔物が自分の眼鏡に適うのかを吟味している最中なのだ。

すなわち、ソレにとっての魔物たちの潜伏行為とは、皿に載った食材がどうぞ食べてくださいと己の身をさらけ出していることに他ならなかった。

影が動いた。今日の獲物を選択したのだ。

犠牲者は、まだ己が選ばれたとは気づいていない。

ソレは一直線に近づいてくる。

そうして視界いっぱいまでそれが近づいた時点で、ようやく魔物は自分が見つかっていたと気づいた。

気づくのが遅かった。ソレが動く前に一目散に逃げ出せば、砂粒ほどの可能性で生き延びることができたかもしれないというのに。

いや、たとえ即座に逃げ出したとしても、ソレに見つかった時点でこの魔物の命運は尽きていただろう。

それが、最強の魔物、ドラゴンの餌に選ばれた者の運命なのだから。

ドラゴンは、周囲の土ごと獲物を口の中に吸い込み、大空へと飛んでいった。

あとに残されたのは、森にぼっかりと開いた巨大な噛み跡だけだった。



「おっはよー！」

モンスターズギルドの事務所兼住居である掘っ立て小屋に、少女のような甲高い声が響き渡る。この声は少女のものではない。れっきとした大人の女の声だ。声の主は子供の胴体と大きな鳥の羽、膝からは猛禽類の足、お尻からは尾羽が生えている。

鳥の魔物、ハーピーだ。

ハーピーは空を飛ぶために非常に軽い体をしている。

その小柄な身体は、一見すると子供のようだ。胴に凹凸はほとんどなく、風の抵抗が少ないキレイな流線型をしていた。

そしてその肉体に精神が引つ張られているのか、ハーピーは総じて子供のような性格の者が多かった。もちろん声もだ。

「……ああ、おはよう」

至近距離でハーピーの声を聞かされたライズは、眠い目をこすって体を起こす。

少々耳がキーンとするが、そのうち治るだろう。

「ふあっ……」

大きなあくびをしながら服を着替える。

服は、前日のうちにラムミアがキレイに洗濯していた。

水の馬であるケルピーがタライに綺麗な水を吐き出し、ラムミアが自分の尻尾の蛇腹を洗濯板

にして汚れを落とす。

そしてサラマンダーが抱いたドラゴンの鱗製アイロンを使って、服のシワをキレイに伸ばす。そのままアイロンを当てると服が傷むので、トレントの葉っぱを使って布地を保護する。

シワ取りが終わる頃には、トレントの木のニオイが白檀びんたんのような香りを服にしみこませる。かくして、見る者が見れば垂涎の道具を使って、最高級の手入れがされた普通の服をライズ

は着る。

ちなみに、トレントの香りは森の中では魔物に襲われにくくなり、同じトレントからは友好的に接してもらえるとという特典つきだ。

「とりあえずコカトリスの卵でももらって朝飯にするか」

ライズの秘書役であるラミアは家事万能の完璧世話役だが、爬虫類型の魔物であるため、朝の寒さには極度に弱いという致命的弱点があった。

なので朝食はもっぱらライズの役目であり、そこにドライアドの用意した清潔な朝露の水がドリンクとして付いてくる。

ライズが掘っ立て小屋の外に出ると、ズシンという地震かと思うほどの振動が襲った。だがライズは慌てない。音の主が誰か知っているからだ。

「帰ったぞ、主よ」

それはドラゴンだ。

ドラゴンは毎朝大魔の森まで出かけ、朝食を獲った後、牧場で暮らす肉食の魔物たちの分まで食事を確保してくれる。

彼の役割はライズたちの食生活にとって非常に重要だ。さらに、食材にできなかった毛皮や骨といった魔物の素材は、町長たちとの契約である魔物の間引きを行っているという証として販売していた。

これは、モンスターズギルドの大切な収入源である。

「主よ。森には魔物の子供が増えている。繁殖期で増えた魔物の子供たちが、近く食料を求めて森の外に出てくるだろう」

ドラゴンがライズに警告してくる。

ドラゴンの仕事は魔物の間引きだが、食いでのない子供の魔物を狩るなどというくだらないことはしない。実際には、的が小さいのでいちいち狩るのが面倒なだけなのだ。

「分かった。冒険者ギルドの長に話しておくよ」

「うむ」

それだけ言うと、ドラゴンは皆の餌の魔物を置いて、自分の定位置である小高い丘へと向かっていく。

その姿を小さな魔物たちがキラキラとした目で見つめている。
最強の魔物ドラゴンは、彼らにとって英雄に等しい存在であった。



「はあ……」

そんな英雄だったが、彼は何故か憂鬱な顔でため息を吐いていた。

「我も何でも屋として役に立ちたい……」

巨大すぎ強すぎるが故に、彼の悩みは深かった。

彼は、いまだ己にこなせる仕事を見出せずにいたのだ。

だが魔物の王たるドラゴンが、そんなくだらないことで悩みを口にするわけにはいかない。

ドラゴンとはプライドが高い生き物であり、プライドが高いからこそドラゴンなのだ。

「おーい、ドラゴン！」

ライズがやってくる。

「主か。我に何か用か？」

ライズに不安を与えまいと、ドラゴンはいつものように毅然とした態度で接する。

空元氣も元氣のうちだ。

「最近悩みがあるみたいだけど、何を悩んでるんだ？」

彼の主は、悩みがあることをピンポイントに指摘してきた。

隠していたことがバレていた驚きで、ドラゴンの口から軽くブレスが吹き出る。

「うわっ！ 危ない危ない！」

「おお、すまない主」

危うく自らの主を燃やしてしまいそうになったドラゴンは、慌てて前足で口をふさぎ、ライズに謝罪の言葉を投げかける。

「だが私の悩みとは一体何のことだ？」

既に悩んでいることがバレているとしても、それでも強がるのが強き者の矜持きやうじ。

特に主にだけは、己の弱さを知られるわけにはいかなかった。

「いや、だつてよくため息吐いてるじゃないか。丸分かりだよ」

「……」

人間とは顔面の構造が違うドラゴンであったが、ライズには彼が赤面したように思えた。

そして、実際にそれは間違いはなかった。

（くおおおおお！ 我としたことが種族の体格差を忘れていたとは不覚うううう!!）

そう、最強種たるドラゴンは体の大きさも他の魔物たちとは違う。

つまり彼がため息を吐いて悩んでいる姿は、牧場中の皆が気づいていたのだ。

「皆心配してたぞ。悩みがあるなら相談してくれよ。俺はお前の主なんだぞ」

ここで強がりを言って、はぐらかすのは簡単だ。

だが彼は己の主の性格を知っている。

粘り強く交渉して己を従魔として契約させることに成功した主が、一度や二度の拒絶で諦めるはずもない。

間違いない。何度でも何度でも食い下がってくるだろう。

「大したことではない」

そんな光景を他の連中の酒の肴にさせるくらいなら、素直に白状した方がまだマシだ。

ドラゴンは観念して、自らの内に抱える悩みを吐露したのだった。



「なるほど。闘うだけでなく、何でも屋の一員として働きたいと」

「そうだ」

5章 魔物たちの新しいお家

「さらば我が家よ」

ライズは悲しみを称えた表情で、朽ちた木材を見つめていた。

「お前との日々は忘れない」

「なにせあつという間だったからな。ブヒヒンッ」

ユニコーンが愉快そうに笑い声を上げる。

「ガチャツとな、ガチャツとドアを開けた瞬間にガラガラだからな！」

心底愉快そうに、その時のことを語るユニコーン。

そう、目の前の残骸は、ライズたちが住んでいた掘っ立て小屋のものだった。

あの嵐の日、ライズとドラゴンたちが隣町へと向かったその晩、掘っ立て小屋は激しい風雨によって致命的な打撃を受けた。

掘っ立て小屋を守ろうとトレントたちが壁になって守ってくれたが、それでもドラゴンほど大きくない彼らでは完全に守り切ることはできず、つい先ほどライズがドアを開けようと取っ手を引っ張った衝撃でその短い生涯を終えた。

ライズは現実逃避のため、掘っ立て小屋の葬式をしていたのだ。

「主よ、そろそろ現実に戻ってくるがよい」

ドラゴンが呆れた口調でライズを諷める。

「壊れたものは仕方がない。新しく建て直すのだ」

彼の言うことは正しい。壊れたものは元には戻らないのだから。

それ故、彼の言葉は非常に理にかなっていた。

ライズにもそれは分かっていた。

壊れたものは仕方がないと。新しく建て直すのが建設的な意見だと。

しかし、それでも彼はやるせない思いを抱いていた。

ドラゴンの背に乘せられた特注の鞍を見ながら。

彼の鞍は特注品である。

最大15人の乗客が乗れる座席に、荷物を置く荷台、それにドラゴンの空中機動に耐えられるだけの固定具に金具。その素材は希少で高級な部品を使っており、普通の家どころか豪邸が数軒建つ金額の品である。

一見商売繁盛のための必要経費に思えるが、これは初期投資という名で職人と商人にハメられた経営の素人の苦い記憶の証でもあった。

本来ならドラゴンの背中に人を乗せるだけのお気楽な運送業を営むつもりだったライズだが、より多くの客と荷物を運べるという甘い言葉に乗ってしまったせいで、想定外の出費となってしまうのである。初回の搭乗費を安くするという約束で商人たちがくれた材料を見て、予想よりも安く済むと考えたのが甘かった。彼ら商人は、ライズの提案した空中輸送業の有用さに誰よりも早く着目し、彼がいつか十分に稼いだと判断して途中で運送業を辞めたりしないように、続けざるを得ない理由を用意したのだ。その第一弾が、この高価すぎる商売道具である。

彼らは、これからもライズの油断を誘って高価な商品を売りつけにくることだろう。ライズの役に立ち、彼が望む品を提供する。真の商人は客が本当に欲しい物を読み取り、その1ランク上の品を売りつけてこそ一人前なのである。

というわけで、ライズは金に困っていた。

「さて、事務所兼我が家が潰れてしまいました。どうしましょう」

膝をつき、両手を大地に乗せたその姿は、まるで彼が見えない運命に土下座をしているかのようにも見えた。

ぶっちゃけてしまえば、金銭管理が甘かったのだ。

「とりあえず大工の親方さんに見積もりをしてもらってはどうですか？ そのうえでドラゴンの売り上げを新しい家の建築費用に充てましょう」

「そうだな」

ラミアの現実的な提案を受け入れ、ライズは親方の家に向かうのだった。



「おう、いいぜ！ 支払いはある時払いで構わねえ！ 用意でき次第ある分を納めてくれ！」

「ええ!? いいんですか、それで!？」

家の新築の相談にきたライズは、親方から提示された予想外の好条件に驚いた。

「驚くことはねえだろう。お前さん家のドラゴンの稼ぎは、鞍を作った俺たちもある程度は知っている。それにお前さんたちは息子の嫁の恩人だからな。こんな時くらい礼をさせてもらう

わー！」

まさに情けは人のためならず。産婆の件は親方にとって大きな恩であったのだ。

彼は早速その恩を返せると考えて、ライズにある時払いでの取引を持ちかけた。

もちろん本人の言う通り、ライズの稼ぎを信用してのことだが。

「じゃあ青図面を引くからよ、新しい家に欲しい物を言ってくんな！」

かくして、ライズの新しい家の計画はスタートしたのであった。



カンカンカンと釘を打つ音が聞こえる。

ここはライズの何でも屋兼牧場であるモンスターズギルドの敷地だ。

音の正体は、大工たちが奏でる金槌の音だ。嵐によって以前の事務所が廃墟となってしまうたので、現在新しい事務所を建設中なのである。

大工の親方の好意によって、建築費用はある時払いとなっており、定期的に大工の手伝いに行っているラミアの給料も費用代として返済に充てられていた。だがラミアの給料はそれほど高くなく、やはりドラゴン馬車が借金返済の重要な収入源となっていた。

(早く稼いで借金を返済しないと。親方たちにも生活があるから迷惑はかけられない)

彼らの生活を多少なりとも圧迫していることを自覚し、ライズはどのようにして今以上に金を稼ぐかを考える。

だが、当の大工たちはというと……。

「ラミアちゃん！ ちょっと降りたいから運んでくれるかい？」

「はい！」

作りかけの事務所の2階部分で待っていた大工の体に、尻尾を伸ばしたラミアが後ろから抱きつく。

「おほっ」

そして、大工が落ちないようにギュッと抱えながら地上へと降りる。

その最中の大工の顔は緩みきっており、ラミアとの特定部位の接触を心から楽しんでいた。そんな彼らの内心には、建築費用後払いへの苦悩など欠片も見受けられなかった。

「皆さん、そろそろ休憩されてはいかがですか？」

ドライアドが自分の蔓をお盆状にして、木製のカップに入った水を運んでくる。

「おう！ お前ら！ ちっと休憩すんぞ！」

「「へい！」」

「トレントが森で採取してきた果物もありますわよ」

親方の号令で大工たちがぞろぞろと出てきて、ドライアドから水と果物を渡される。

「いやー、ドライアドちゃんの水はほんと美味えなあ！」

「ふふふ、ただの水ですわよ」

大工たちのお世辞をドライアドがさらりとかわす。

「いや、実際に美味いぜ。井戸水を沸かした水とはどこか違う」

親方の言う通り、ドライアドの用意した水はただの水ではない。

朝露だけを集めたその水は、ドライアドの魔力を受けた特別な水だ。

その水には魔力がふんだんに込められており、弱い疲労回復効果で魔法使いが飲めば消耗した魔力を回復させる魔力回復薬としても使えるほどだ。

魔法関係の道具を扱う店で買ったら銀貨1枚はするだろう特別な水を、彼らは無自覚に楽しんでいた。

「親方、どれくらいで家は完成する予定ですか？」

休憩している親方にライズが完成予定日はいつかと尋ねる。

「そうだな。結構デカイ家だから本来なら半年以上かかるんだが、お前さん家の魔物たちが手伝ってくれるからな、もう2〜3カ月は早くなるかもしれない」

新しい事務所の建築には、ライズの魔物たちが自主的に協力を申し出ていた。伐採したばかりの生木を建材として利用するには、木の内外を乾燥させなければならぬ。

そのため、大きな屋敷ほど建材として使う木材の製造には時間が必要となる。

さらに、デクスシの町があるテンド王国東部は雨季になると雨が多いので、材木の確保には金と時間がかかるのだ。

だがライズの魔物たちが手伝うことで、その手間が大幅に減少する。

6章 ライズのお仕事

「ライズ！ 今日こそ一緒に帰ってもらおうわよ！」

「やあ、レティにメルク」

影の軍団が隣国の特殊部隊を捕らえた翌日、再びレティたちがライズの説得にやってきた。

「いらっしやいませ。レティ様、メルク様」

そんな彼女らをラミアが丁寧に迎え入れた。

「おはよう、ラミア」

メルクがラミアと挨拶を交わす。

「ライズ！ 貴方も元軍人なら敵に攻め込ませないための抑止力の大切さは分かっているでしょう!? この国を再び戦火に巻き込まないためにも、貴方は必要な人材なのよ！」

レティの言葉をおとなしく聞いていたライズだったが、彼はこの説得内容のことを既に知っていた。ケットシーに2人の宿を監視させていたからだ。

そして彼女たちの説得内容から、いかに軍と軋轢あつれきを生まないようにお帰り願うかあらかじめ準備していたのだ。

「悪いんだが、今日は朝から仕事があつてね。説得もいいが、まずは俺たちの働きっぷりを見てくれないか？」

「だから軍に戻れば、こんな町で小さな仕事なんか……！」

「レテイ、仕事の邪魔をしちゃいけないよ。仕事というのは、他の人間もその輪に加わっているとということなんだ。それを邪魔すると、他の人たちの迷惑になる」

食つてかかるレテイをメルクが諫める。

「そうそう、仕事が失敗したら違約金として大金を払うことになるからな。軍が全ての違約金を無償で支払ってくれるのなら交渉の続きをしてもいいが、損なつた信頼を取り戻すまでの補填としてさらに数倍の違約金も請求することになるぞ？」

「数倍!？」

いくらかは分からないが、決して安い金額ではないだろうことに、レテイは身を硬くする。

「そんなじゃ牧場に行くから、ついてくるといいさ」

それだけ言うと、ライズは2人の返事を待たずに掘つ立て小屋から出ていく。

「あ、こら！ 話は……」

「レテイ、まずはライズの働きぶりを見ようじゃないか。彼が戻らないというのに相応しい働きぶりなのかをさ」

「……分かった」

もともと想定していた事態だったのだろう。レティはなんとか堪えてメルクの言葉に従った。



ライズたちがやってきたのは、鳥の魔物コカトリスの巣だった。

「コ、コカトリス!？」

コカトリスは、視線で見た者を石にする魔物だ。

魔法抵抗力が高い者には恐れるほどではないが、そうでない者には恐ろしい存在である。慌ててレティたちはコカトリスから身を隠す。

「大丈夫だよ。ほら、薄目になってるだろ？」

「は？」

ライズが何を言っているのか分からずに、レティたちは間の抜けた声を上げる。

「コカトリスは、ああやって薄目にすることで石化の邪眼を弱められるんだ。あれならレティたちでも、よっぽど弱っていない限りは石化しないさ」

聞いたこともない石化対策を聞いて、首をかしげるレティたち。

確かによく見ると、コカトリスは目を細めている。まるで視力の低い人が、目を細めて見ているみたいだ。

「こんなことで石化の邪眼が弱まるなんて」

「驚きだねえ」

「まあ、普通はコカトリスが意図的に邪眼を弱めるなんてことないからな」

新発見に驚くやら、呆れるやらといった様子の子のレティたちを置いて、ライズは座っているコカトリスの腹の下へと潜る。

「え?! 何!?!」

ライズの突然の奇行に驚くレティ。

「あれ、気持ちよさそうだよね」

「実際、寒い日はコカトリスの羽毛に包まれるととても暖かいですよ」

メルクの冗談にマジレスで応えるラミア。

「あら、そう考えると、コカトリスの抜け毛をキレイに洗ってお布団にするとよさそうですね」
新しい商売のアイデアを考えついたラミアが楽しそうに笑う。

「それって巨人用の布団になるんじゃないかしら?」

ラミアのつぶやきを聞いたレティは、地面に落ちていたコカトリスの巨大な羽根を見て呆れ

がちに言う。

「で、何でライズはコカトリスの中に潜っていったんだい？」

メルクがラミアに問いかけると、ラミアはゆっくりとコカトリスを指差した。

「それはアレを見れば一目瞭然かと」

2人が振り返ると、コカトリスの下から大きな卵を抱えたライズが出てきたところだった。

「なるほど、卵が狙いだったわけね」

「ええ、そしてコレからが本番です」

「本番？」

どういふことかとレティたちが首をかしげると、突然大きな奇声が轟いた。

「え？ な、何!？」

慌てるレティたちの横をライズが全力で駆け抜ける。

「お2人共逃げますよ！ 卵を奪われたコカトリスが激怒しています！」

警告するラミアも既に全力で逃亡を開始しており、遠くへと逃げていた。

「え……ええー！」

「コケエエエエエエー!!!」

怒りに燃えた雄叫び。

振り向くまでもなく、コカトリスの雄叫びだ。

「う、うわあああああ……！」

レテイとメルクも全速力で逃げ出した。

コカトリスが翼を広げながら2人を追いかける。

「と、飛んでる！ 飛んで追いかけてくる！」

「いや、あれは飛んでいるんじゃないやなくて滑空してるんだよ。コカトリスは鶏型の魔物だからね。空を飛ぶまではいかないさ」

「どっちでも関係ないわよー！」

後ろからバツサバツサと翼を飛ばたかせ、何度も飛び上がって滑空しては追いかけてくるコカトリス。

それは、2人にちょっとしたトラウマを刻み込む事件であった。



「ちなみにコカトリスはバカだから、暫く動き回ったら卵を奪われたことを忘れて巣に戻るんだ」



やっこのことで掘って立て小屋に帰ってきたレイティたちは、卵を洗っていたライズから開口一番コカトリスの対処法を教えられた。

「いやー、今日は2人が囧になってくれたお陰で楽に卵を回収できたよ。ありがとう」

「……オト……リ？」

「いつもは足の速い魔物たちに協力してもらおうんですけどね。さすが、お2人は軍で鍛えているだけあります」

ラミアが2人の健脚を賞賛する。

「……っ！」

利用された怒りでライズをぶん殴ってやりたいと思ったレイティだったが、全力疾走を続けたせいで、もはや怒る気力もなかった。

「そんじゃ俺たちは町に卵を売りにいくけど、2人は休んでるかい？」

卵を荷車に載せてライズが聞いてくると、レイティが立ち上がる。

「もちろん行くわ！」

「僕は暫く休憩してから追いつくよ」

メルクはもう限界と、地面に大の字になって寝転がる。

「そんじゃ、配達に行くか」

7章 にじり寄る食欲

「はあああ！」

硬い革鎧に身を包んだ戦士が、雄叫びと共に戦斧を振り下ろす。

「ギヤアアアアオオオッー!!!」

戦士の攻撃を受けた魔物は、脳天から股間まで切り裂かれて真っ二つになる。

「フリーズボール!!」

周囲への影響を考えて、魔法使いが氷の魔法を放つ。

「グキヤッ!!!」

周囲を木やヤブに囲まれたその場所は、魔物の逃げ道を著しく減らす。

邪魔な植物を掻き分けている間に魔法は魔物に命中し、その半身を凍らせた。

「セイツ！」

魔物の動きが鈍ったところで、戦士が背後から魔物を両断し、周囲で彼ら以外に動くものはなくなつた。

「はあはあはあ」

魔物たちが全滅し、ようやく一息つけるようになったことで、彼らは地面にへたり込んで荒い息を吐く。

「大分狩ったな。コイツの素材を剥いたら町に帰るか」

「そうだな」

彼らは冒険者だった。さまざまな町へと旅をし、その場その場で危険な仕事を請け負って日々の糧を得る根なし草。いっどこで死ぬかも分からない、危険すぎて割に合わないことも多々ある仕事だ。だがそんな危険な仕事だというのに、冒険者になりたがる若者の数は減らなかつた。

「しかし魔物が多いな。大魔の森の魔物は、魔物使いのドラゴンが間引きしてるんだろう？」

戦士がぼやきながら、魔物から金になる素材を剥いでいく。

「この時期だからな。繁殖期で増えた魔物が例年よりも多かつたんだろうさ」

「となると、そろそろ魔物狩りの時期か」

戦士がウンザリした様子で大魔の森がある方向を見る。

「毎年恒例の魔物が大量発生する時期。今年も、もうそろそろだな」

その時は、彼らが想像するよりもずっと早く訪れることになる。



「というわけで、正式にこの町の駐在騎士になるようにと辞令が下りたわ」
メルクが帰還して1カ月後、町に残ったレティがそう伝えにやってきた。

「えーっと、おめでどう?」

「ええ、おめでどうよ」

内心では左遷なんじゃないかと思ったライズだったが、レティが嬉しそうだったのでその言葉はあえて心の中に止めておいた。

「で、この町でどんな任務を行うんだ? 自警団は既にあるし、ヘタに動くとも現地住民の軋轢を招くぞ」

レティに与えられた任務はとつくに理解しているが、当のレティはそのことを知らない。そのため、お互いの認識に齟齬が生まれないように、ライズは互いの情報のすり合わせを行った。「表向きは、大魔の森から人々を守る騎士団の駐屯地ね。でも本当の目的は、ライズを保護することよ。ライズは強い魔物を従えているけど、それは闘いの場面で有効なだけで、例えば他の貴族や特定の組織にその力を利用されないと限らないわ。そんな時のために騎士団の権力を振りかざして、私がライズを守るの!」

若干、私がの部分が強調されていた気もするが、レティの話した内容はメルクと取り決めた約定に沿ったものだった。

(要は物理的な護衛じゃなく、権力としての護衛ってわけね。まあ、俺には特殊部隊を無効化する護衛がいるわけだし、そこに予算をかけたくはないわな)

「で、騎士団の他のメンバーは？」

ライズの元にやってきたのはレティだけだ。

もし部下がいるのなら、護衛対象に顔合わせくらいさせるだろう。

「いないわ。デクスシの町の騎士団は私一人よ！」

普通に考えればかなり異常なことだが、その方がいろいろと楽なので、ライズもあえて突っ込まないでいた。

(予算をギリギリまで切り詰めての嫌がらせだな。けど裏では、俺を監視している連中はまだいる。多少腕の立つ人間を用意したらしいが、それでも町にいる猫が全てケットシーの手下だとは気づいていないみたいだ)

ケットシーは、猫の王とも呼ばれる魔物だ。

彼らは同属同士で遠距離間の連絡を行うだけでなく、同じネコ科の生き物を従える能力を持っている。その能力を使って、ライズは国中からさまざまな情報を得ていたのだ。

ライズが軍人時代に活躍できた理由の一つが、このケットシーの情報網のお陰なのである。そのケットシーから得た情報で、ライズはこの町に大きな危機が迫っていることも知った。「すみません！ ライズさんはいらっしゃいますか!？」

その時、ライズの事務所兼掘っ立て小屋に女性の声が響く。

「はい、いますよー」

レティとの話を切り上げて、ライズは声の主に答えつつ、壁のない掘っ立て小屋の入り口（と仮定した方向）へ歩いていく。

入り口（仮）に立っていたのは、20代前半と思われる女性だった。

「ライズ＝テイマーさんですね。冒険者ギルドより参りましたイノと申します」

イノと名乗った女性は、ライズに軽く頭を下げて挨拶する。

（堅そうな人だなあ）

イノのピシヤリとした印象から、おそらくはマジメな人間なのだろうと推察するライズ。

「初めまして、イノさん。今日は何の御用ですか」

何を言われるのか既に分かっているライズだったが、あえてイノの口から聞くことにする。

「本日はライズさんに仕事の依頼に参りました」

「依頼ですか。一体どんな依頼で？」

イノはライズを正面から見据え、一拍おいた後、真剣な表情で依頼内容を告げた。

「大魔の森からやってくる大量の魔物の討伐と、その補助を依頼したいのです」

「それは、大魔の森の魔物の繁殖期に関連する依頼ということですね？」

「ええ、おっしゃる通りです」

ライズの問いに対してイノはゆっくりと頷く。

「しかし魔物の繁殖期は毎年あります。今まではどうしていたんですか？」

イノの様子から単に戦力を追加したいだけではないと感じたライズは、依頼を命令したトロウの真意を問う。

「これまででは、周辺の町の冒険者ギルドと連携し、冒険者総動員で魔物狩りを行っていました。それに今年からはライズさんの使役する魔物が森の間引きを手伝ってくださる約束でしたから、例年よりも魔物の討伐ペースも早く、安全な魔物狩りになると考えられていたのです。しかし複数の冒険者たちより、今年は例年に比べてかなり魔物の数が多いとの報告を受けたのです」

「ふむ」

イノの言葉から状況を吟味するライズ。

(確かにドラゴンもそんなことを言っていたよなあ)

「あ、いえ、ライズさんを疑っているわけではありませんよ。ライズさんのドラゴンが毎日大

魔の森に飛んでいく姿は城壁の衛兵が見ていますし、町の名物として住人や旅人たちにも人気ですから」

（そうだったのか。多少は町の人たちにも受け入れられているってことかな？）

「それにライズさんには、毎日証拠として冒険者ギルドに魔物の素材を卸してもらっていますからね。欲をいえば、不足している素材を狙って間引きしてくださいとありがたいのですが」

「獲ってくるのはドラゴンですからね。ドラゴンには雑魚の魔物なんてどれも同じなので、いちいち選んだりしませんよ。まあ味の好みなのか、好んで食べる魔物が何種類かいるみたいですよ」

「ああ、そういうことだったんですね。どうりで特定の魔物の素材が多いと思いました」

かねてより気になっていた疑問が解消されたことで、小さく笑みを浮かべるイノ。

（そっか、ライズさんのところのドラゴンは熊が好きなのね）

実際には熊の魔物は体が大きく食いだがあるから好きなのだが、この時点での彼女には知るよしもなかった。

「そういうわけですので、こちらの日程に合わせて回復魔法の使える魔物と即戦力になる魔物、特に遠距離からの攻撃が可能な魔物を優先的に使えるようにしておいてください。作戦の詳細はギルド長が直接お話することですので、今日か明日の午後に冒険者ギルドに来ていただ

けますか?」

「分かりました。魔物たちのスケジュールを調整したら、そちらにうかがいます」

「ありがとうございます。魔物狩りの前後にこの町の住人からの依頼が重なる場合、依頼人にギルドと町からの緊急指名だとお伝えください。全ての責任は我々が持ちますのでご安心を」
それだけ言うと、イノは冒険者ギルドへと戻っていく。

せめて水だけでも出そうとしたライズだったが、彼女も忙しい身らしくやんわりと拒絶されてしまった。

「まだ打ち解けてくれないのか、それとも元からああなのか悩むところだなあ」

「両方じゃないの?」

帰らずに残っていたレティは言う。

「で、受けるの?」

「まあね。町の人間と打ち解けるには打ってつけのイベントだろ? レティはどうする?」

「もちろん参加するわ。危険な魔物から民を護るのは騎士の役目だから。……えっと、ライズの魔物は危険じゃないわよ」

何気なく言った後で、自分の発言を恥じるレティ。そんな姿がちよっと可愛いと思うライズであった。

8章 デクスシの町防衛線！

そして3日が経過した。

「ライズ様ー！」

偵察に送っていたハーピーが、作業を手伝っていたライズの所に降りてくる。

「どうした？ 森に何か動きがあったか？」

「うん、沢山の魔物が森から出てきたよー」

ハーピーの報告に、周りにいた人々からざわめきが生まれる。

「どれくらいだ？ 町にはどの程度で辿り着く？」

「うーん……沢山！ 森がぶわって広がったよ！ 足の速いのは1日くらいかな。遅いのは2

〜3日かかると思うよ」

「空を飛ぶ魔物は来ないのか？」

「特にいなかったかな」

「広がった森は全部か？ 1カ所だけか？」

「沢山！」

「この町の方角に広がったのか？」

「んー、いろいろ！」

情報を聞いたライズは、その内容を吟味して正確な数字と状況を推測する。

（広がった森ってのは、魔物の集団のことだろう。恐らく1つの膨らみで数百ってところか。他の場所も盛り上がったってのは、この町に全部来るのか、他の町にも向かっているのかで状況が変わってくるな）

「ハーピー、悪いが森から出た魔物の集団が全部こちらに来るのか調べてくれ！」

「おっけー！ 任せといて！」

ライズからの追加指示を受け取ったハーピーが、空を飛んで大魔の森へと向かっていく。

「急がないとな」

ライズたちは互いに頷き合い、迎撃の準備を急ぐ。

「ユニコーン、戦闘が近づいているから、お前も配置についてくれ。素早く動きながら回復ができるお前は後方の切り札だ。よろしく頼むぞ！」

ライズの激にユニコーンも真面目な表情で頷く。

「ムサイ男どもを治療するなど御免だが、この町の少女たちを守るためだ。任せてもらおう！」
ユニコーンが所定の位置に向かおうとした時、彼を呼び止める声が響く。

「ユニコーンさん！」

それはライズたちの協力者である少女、マリアだった。

「む、マリアちゃんではないか！ ここは危ないぞ。町の中に戻りなさい」

だがマリアは戻ろうとせず、ユニコーンを前にモジモジとしていた。

（一体この子はどうしたのだ？ ……はっ！ まさかこの様子、もしかしてこの私への愛の告白!?）

マリアの不審な様子に、トンチキな勘違いをするユニコーン。

（だとすれば、ここは言葉を急かす野暮な真似はするまい。いい男は相手の言葉を待つものだ）
見た目も心もイケメンを自称するユニコーンは、マリアの言葉を辛抱強く待つ。

「おーい、ユニコーン！ 早く位置につけ！」

ここでライズの声がかかる。

「分かっている！ もう少し待て！ 今はマリアちゃんとだなあ！」

「い、いいの！ えっと、えっと、そう！ 私、ユニコーンさんの応援に来たの！ 頑張っ

ね、ユニコーンさん！」

マリアはユニコーンに激励の言葉を伝えると、そのまま町に戻っていく。そして、一度だけ振り返る。

「怪我しないでねー！」

とだけ言って町の門へと入っていった。

「……」

「おい、ユニコーン？」

無言で固まるユニコーンに、ライズが声をかける。

「……ブ、ブル」

「ん？ どうした？」

「ブルヒヒイイイイイインツ！！ よーしっ！ 頑張るぞおおおお！！」

ユニコーンは今にも魔物たちの群れへと飛び込まんばかりに気合を漲みなぎらせるのだった。



「魔物が来たぞー！」

城壁の上に増設された新しい物見台から、見張りの声が届く。

彼らが立っている物見台は、通常よりも高く、補強のために城壁内の地面まで伸びる支えで補強されていた。

「数と距離は!？」

城壁に立っている報告役の兵士が、追加情報を要求する。

「数え切れない！ 緑が8、黒が2だ！ まだ増えるぞ！」

目視での限界故に、一定量を超えた数を数えるのは不可能だった。

魔物の姿が肉眼で見える距離まで近づく頃には、デクスシの町は臨戦態勢を整えていた。

「よし、これより魔物討伐作戦を行う！ いいか！ 今回は隣国との戦争が終わった影響で、今までは比べものにならないほどの魔物が襲ってくる！」

トロウの言葉に兵士たちから動揺が走る。

「だが心配するな！ いざとなればライズ殿の魔物たちが協力してくれる！ 今は別件で出ているが、それが終われば彼が従えるドラゴンが戦闘に加わる予定だ！ お前らの足りない頭でも、ドラゴンが戦線に加われば勝利は間違いないことは分かるだろう!？」

「足りないは余計だー！」

「足りないのはお前の前髪だろー！」

冒険者から冗談交じりのブーイングが飛ぶ。

「ドラゴンが戦線に加わるまでは、まだしばらくかかる！ それまではいつも通りの防衛線だ！ 決して油断するなよ！ あと俺の前髪はフツサフサだ！」

「任せろー！」

「誰に言ってるやがるー！」

冒険者たちは怯むことなくトロウの激に応えてゆく。

「おう！ そんなら頼むぜお前ら！」

「「応よっ！」」

士気を上げるために、冒険者たちの中に仕込んだサクラたちが元気よく返事をする。こうした細かい気遣いができるところが、トロウをギルド長の地位に押し上げたのではないかとライズは感心していた。

「ふー、これでしばらくはドラゴンの参戦が遅れても大丈夫だろ」

最初の仕事が終わったトロウは、城壁の上に設置された物見台兼司令室の椅子に座って溜息を吐く。というのも、本来であれば、ドラゴンはどうの昔に馬車の仕事が終わって、参戦準備が整っていたはずなのだ。だが、先日、とある男が冒険者ギルドに殴り込み同然で飛び込んできて、家族の一大事なので何とかドラゴン馬車に乗りたいとギルドの受付で大騒ぎをするという騒動があったのだ。

このような状況なので男の頼みを受けるわけにはいかないトロウだったが、とにかく騒ぎ立てる男に、ギルドの職員や仕事を求めに来た冒険者たちも迷惑していた。ついには町の住人も

ギルドの入り口から遠巻きに眺める始末だ。

これだけ騒ぎになってしまった以上、男をにべもなしに放り出したりしたら、何を言われるか分からない。ギルド側の事情はちゃんと伝えたが、いつの時代にも自分のことしか考えずに逆恨みする者は確実にいるからだ。

やむを得ず、トロウはギリギリまでドラゴン馬車の配達範囲の延長を余儀なくされた。ギルドはイメージも大切であり、変な噂を立てられないための苦肉の策だった。

そのことを思い出し、トロウはため息を吐く。

「まったく、タイミンクの悪い時によくないことは重なるもんだ」

「まあ、仕方ありませんよ。今はある手札だけで頑張りましょう」

ライズがトロウを宥める。実際のところ、トロウが残念がつているのはドラゴンが即時参戦できないことよりも、ドラゴンの戦いを見られないことにあった。今年の防衛戦はいつもより魔物が多いとはいえ、これまでドラゴンが一定サイズ以上の大型の魔物を定期的に間引きし、さらにライズの魔物たちが防衛戦に加わるのだ。最良の場合、いやトロウにとって最悪の場合、ドラゴンが参戦することなく防衛戦が終了してしまうかもしれない。

「そうだな。よし、気を入れ直して戦いに集中するか！ 敵が迎撃ラインを超えた時点で遠距離部隊は攻撃を開始しろ！」

トロウから号令がかかると、城壁に待機している冒険者と町の自警団員、それに民間の志願兵から雄叫びが上がる。

彼らは弓や杖を構えて、敵が近づいてくるのを待っている。

町の周辺には円形の溝が3つ引かれており、そこが魔法や弓矢の有効距離であった。

今回の戦力は訓練を受けた軍人でないため、個人の練度の低さを補うための目印として溝を掘っている。外側から順に、弓矢魔法で戦う者や狩人用、実戦経験はあるが弓矢は使ったことがない者用、そして一番内側の円が素人が撃ってギリギリ戦力としてダメージを与えることができる距離だ。

幸い今回の敵は大量にやってくるため、狙いをつける必要がなく、そういう意味では民間人の志願兵を雇うメリットがあった。

この民間人を起用するアイデアは、軍人であるレティの提案である。

今回の戦いでは、どれだけ多くの魔物がやってくるか分からない。

それ故、急造であっても戦力は喉から手が出るほどほしい状況だった。

「敵、第1ラインに接近！」

見張りが声を上げると、城門の外で待機している熟練兵部隊に緊張が走る。

「まだ熟練部隊以外は弓を番^がえるなー！」

ようこそ モンスターズギルド

Monsters' Guild

~最強集団、何でも屋
はじめました~

十一屋翠
イラスト jonsun

試し読みはここまで
続きは書籍版でお楽しみください

書籍情報はこちら

http://books.tugikuru.jp/detail_monster.html

ウェブ
トゥキクル